

私の帰る処

いしざわみな

登場人物

齋藤枇南子（さいとう ひなこ） 五〇歳
小川陽花（おがわ ようか） 四五歳
小野七海（おの ななみ） 二〇歳

【第一場】

二〇一七年、初冬。東京都内の住宅街。
古い民家の十畳ほどの広間。昼過ぎ。

上手には床の間があり、古いけれど立派なクリスマスリースが飾られている。床の間の近くに座布団。下手は障子で仕切られ、障子を開けると廊下があり、廊下に面した窓から、広い庭の一端が見える。客席からは見えないが、廊下は後方から上手側に延び、その先に食堂がある間取りになっている。

中央に大きなテーブル、小さなガラスの花瓶に花が活けられた花が飾られているが、その花は少し萎れているようだ。下手奥に小さな机があり、庭に向かって椅子が一脚。机の上は整然と片付いていて、文房具が入った箱、アルバム、封筒や書類、料理の本、テッシュケース、小さなカレンダー等がある。

障子が開き、この家の二女、小川陽花が旅行鞆とショルダーバックを持って入ってくる。陽花、荷物を置き、クリスマスリースやガラスの花瓶を感慨深く眺めながら、開放感に浸っている。

若い女（小野七海）、障子の陰からそっと、子どものようにその様子を覗いているが、一瞬、陽香と視線が合ったような気がして慌てて立ち去る。

陽花、廊下に向かい、何かを探すように庭の奥を見つめている。

長女、齋藤枇南子が、盆に珈琲の入ったカップを載せて入ってくる。

枇南子 ちょっと寒い？ ストープも持ってくる？

陽花 全然平気。向こうの寒さに比べたら。

枇南子、花瓶の花を隠すように机の上に移動させると、持ってきた布巾でテーブルを力強く丁寧に拭く。拭き終わるとコーヒーカップを置き、座布団を一枚正面に置く。

陽花 枇杷の花、まだ？

枇南子 枇杷？

陽花 見てないの？

枇南子 見てない。

陽花 なんて？

枇南子 わざわざ見ないわよ、枇杷の花なんて…

陽花 自分の花なのに？ お父さんが聞いたら哀しむわよ。

枇南子 見てなくても咲けばわかるわ。

陽花 あの香りねー（懐かしい）見たいなあ！ 枇杷の花。

枇南子 おかしな子ね。

陽花 （珈琲カップを見て）これ、懐かしいー まだあったのね。

枇南子 ごめんなさいね。取り込んで。前からの予定だったから…

陽花 こちらこそ、急でごめんなさい。ボランティアみたいなもの？ 子ども食堂だっけ？

枇南子 食事するだけなんだけどね。とりあえず、どうぞ。

陽花 いただきます（珈琲を一口飲む）

枇南子 あちらのご両親はお元気？ 私も一度はお見舞いにといいながらなかなか行けなくて、ほんとうにごめんなさい（頭を下げる）。

陽花 こちらこそ、お父さんのことなにもできなくて申し訳ありません（頭を下げる）いいの。たぶん仮設になんか来られたくないから…

枇南子 あんな大きなお家に住んでらしたんだもの、辛かったでしょうね… よく憶えてるわ。裕一さんのお母様が丹精されたお庭が素敵で！ 葵の花の下に大きなキュウリがなっていて、雨蛙がいたのよ…

陽花 お姉ちゃん、東京に連れて帰りたいって言って、みんな呆れてたのよね。

枇南子 どうなっているかしらね、あのお庭…

陽花 私ね、父が泣くのを、初めてみたの。仮設で、ユニットバスを見た時。なんにも悪いことしてないのに留置所に入れられたみたいだって…

枇南子 ホテルもそうだけどね。

陽花 ほとんど福島から出たことのない人達だから。

枇南子 そうだねー

陽花 サダハルの部屋より狭いって。

枇南子 さだはる？

陽花 お父さんの犬。小川貞治。可笑しいでしょ？

枇南子 可笑しい。

陽花 （思い出して）お姉ちゃん！ 父も母も仰天してた。お見舞い金！ いくらなんでも多すぎるでしょ？ 大丈夫なの？

枇南子 ……あれはお父さんがね。私も多すぎるって言ったんだけど、譲らなかつたの。陽花 お父さん、私の状況理解してるの？

枇南子 今はダメだけど、あの頃はね。「とにかく陽花が大変だから、色々言っても先立つものはお金だから」って…

陽花 （涙ぐむ）

枇南子 あとでゆっくり話すわね。あなた、お昼は？

陽花 お腹。ペコペコ！ 東京駅からまっすぐ来たのよ。色々美味しそうな店が出来てたけど、もしかしたらちらし寿司があるかもと思って…

枇南子 もう、いつともぎりぎりの連絡なんだから… 昨日慌てて献立変えたのよ。せっかくだから子どもたちにも食べさせようと思って。

陽花 あるの？ ちらし寿司？ 嬉しい！

枇南子 大皿に盛ってね、ブロッコリーとプチトマトをクリスマスツリーみたいに飾ってみたの。悪くないのよ。年長さんくらいの子もいるの。いっしょに食堂で食べない？

陽花 (躊躇して) 今日は遠慮しとく。

枇南子 そう？

陽花 ごめんね。

枇南子 じゃここへ持ってくるわね。いつまでいられるの？

陽花 ……少し長くいたい。構わない？

枇南子 あなたの家よ、ただいだけいればいいじゃない。

陽花 ありがとう！

枇南子 お母さんの一周忌が最後だから(数える) 六年… もう七年近い？

陽花 信じられないわ… お姉ちゃんと七年も会ってなかったなんて… お父さんとも。

枇南子 あんなにしょっちゅう帰ってたのにね。

陽花 七回忌にはなにがなんでも来るつもりだったのよ。でもあっちのお母さんが骨折しちゃって、裕一も出張だったし…

枇南子 もういいの？

陽花 すっかり！ やっぱり齡とってもよく動いてる人は回復が早いからね。

枇南子 今は別々に暮らしてるんでしょう？

陽花 うん、県内って言っても海岸の方と内陸じゃちがうからね。お父さんたちはできれば帰りたいのよ。でも裕一の仕事があるし… でも私が行ったり来たりすればすむことだから。

枇南子 裕一さん、一人にして大丈夫なの？

陽花 全然大丈夫よ、なんでもできるから。

陽花の携帯電話が鳴り出す。

陽花、(発信者を確認) 噂をすればだ…

枇南子 相変わらずラブラブね。じゃ、持ってくるわね(布巾と盆、花瓶を持って出て行く)

陽花、電話に出ようとせず、珈琲をもう一口飲む。

陽花 まずっ…

枇南子、ちらし寿司と湯飲みを載せた一人用のお膳を運んでくる。箸置きには割り箸が置かれている。

枇南子 陽ちゃん、今見たら私にも裕一さんから着信があったの。かけた方がいい？

陽花 いいいい、私のことお願いしますって挨拶だけだから。

枇南子 大丈夫？

陽花 「お姉さんよろしく」って言ってた。ねえ、最近はインスタント飲んでるの？

枇南子 (苦笑い)「ごめんなさい！ スタッフさんが入れてくれたのよ。あなた嫌がると思っただけ悪いじゃない？

陽花 どういうものなの？ 子ども食堂って。

枇南子 ほら、子どもの貧困が問題になっていてでしょう？ 家で食事が摂れてない子がいてね、給食だけが頼りなのよ。それで月に二回、土曜日にここで食事をつくってみなで食べているの。でも誰が来てもいいのよ。

陽花 家で食事が摂れないって… この辺にもいるの？ そんな子が？

枇南子 片親だけの家庭だったり、外国人だったり色々ね。貧困の問題じゃなくてネグレクトに近いようなものもあるし…

陽花 費用は？ お姉ちゃんが全部持ち出しで？

枇南子 まさか(笑う)少しだけど企業からの寄付もあるし、あとは街の人たちからカンパを集めて… もちろん私も出しているけど。荷物片づけた方がいいわね。

陽花 (割り箸をもてあそびつつ)あたしの部屋でいい？ いつから…

枇南子 お箸ごめんね、今日はそれで我慢してね。二時くらいには終わるから、ゆっくりしてて。

枇南子、足早に出て行くようにする。

陽花 (慌てて)食べたらお父さんところに行ってきたいの！ 電車だとうやうって行くの？
なんて名前だったっけ？

枇南子 ……

陽花 お姉ちゃん？

枇南子 明日、いつしよに行きましょう。

陽花 あしたあ…

枇南子 今から行ってもゆっくりできないでしょ？ 買い物頼まれてるの。お花も買って行きたいし… お父さんにお土産は？

陽花 (呆然)買ってない。

枇南子　じゃあ、なにか買ってらっしゃい。ついでに美味しい珈琲も買って来てちょうだい。
陽花　……わかった、そうする。(思い出して) クリスマスブレンドにしている？

枇南子　(微笑む) いいわね！　お願いね。

枇南子、食堂へ戻って行く。

陽花、気を取り直し、嬉しそうにちらし寿司を食べ始める。しかし、これも馴染んだ味と違っていているような気がする。

七海　(障子の向こうで) 失礼します。

障子が開き、七海と陽花、互いに会釈する。七海、盆に豚汁の入ったお椀を運んで入って来る。七海はまだ少女らしさの残る素直な印象。

七海　(陽花の前にお椀を置きながら) 枇南子先生、お味噌汁忘れちゃって… 妹さんなんですよね？

陽花　……ええ。

七海　私、小野七海と言います。食堂を占領しちゃってごめんなさい。

陽花　お若いのね、主婦の方？

七海　(驚く) 違います！

陽花　学生さん？

七海　……

陽花　ごはん食べに来たの？

七海　……

陽花　近所の方？

七海　大学で子どもの貧困について学習するサークル活動をして… 子ども食堂を手伝わせてもらってます。

陽花　そうなんだ。ごめんなさい、変な事言って…

七海　……

陽花　いつからここでやっているの？

七海　子ども食堂ですか？

陽花　そう。

七海　去年の夏休みからです。

陽花　去年…

七海　それまで借りていた場所が使えなくなっって、スタッフの息子さん、その人は主婦なんですけど、その息子さんが枇南子先生の教え子だったんです。広いお家でお父さんも施設に入っちゃったし、頼んだらすぐオッケーしてくれたって。こういう家、住ん

だことないから、毎回すごく楽しみなんです。なんか昭和な感じっていうんですか？子ども達も喜ぶんですよ。

陽花 そう。

七海 もしかしたら、事情がある子どもが泊まれるように、他の部屋も使わせてもらえるようになるかも知れないって言ってました。

陽花 誰が言ったの？

七海 スタッフの人です。さっき話した… 飯泉さんっていうんですけど、この活動をずっとやってる人で、枇南子先生に相談したって言ってました。先生は子どもの扱いに慣れてるし、スタッフも充実してきたし、そういう場所があれば…

陽花 ごめんなさい！

七海 ……？

陽花 私、今朝いわきを出て、さっきこっちに着いたのね。震災にあってずっと帰ってなかったから、ちよっとくたびれちゃって… できれば静かに食事したいんだけど。

七海 ごめんなさい！ お邪魔しました。ごゆっくり。

七海、出て行く。

陽花 なによ、ごゆっくりって… 自分の家だっつーの！

陽花、もう一度ちらし寿司を口にする。原因を探るように、米粒や具を凝視し、ゆっくりと咀嚼する。再び、携帯電話が鳴る。

陽花

もしもし？ ……そうよ、他に行くところなんてないでしょ？（間）お母さんには、

ちゃんと話しました。大丈夫だから、ゆっくりしてらっしゃって言ってくれました。

（表情が険しく、哀しくなっていく）あー、母の七回忌にも帰れなかったのよ。お

父さんのことだって、ずっとお姉ちゃんに任せっぱなしなのよ。（間）今年の一月。

言いました。（呆れたように）十三回忌の前に七回忌があるの！ そんなことも知ら

ないの？（間）仕方なくないわよ！ 知ってるでしょ？ 家は母が一人っ子だし、お

父さんの兄弟もみんな死んじゃって親戚が少ないのよ。海外に住んでるわけじゃな

いし、いつまでも震災のせいにしてられないでしょ？（間）聴いてるわよ。（間）ち

よっと、お姉ちゃんによけいなこと言わないでよね！ 言ったら帰らないからね！

陽花、感情的に携帯を切る。が、再び鳴り始め、驚く。

陽花

まだなんかあるの？ ……？ りさこって… リンちゃん？ やだビックリ！ 元

気だったあ？ ごめんごめん、ちよっとダンナともめてたの。（間）そうそう、またかけ

てきやがったと思って(爆笑)ごめんねー！ でもよかったー そう、新幹線で。アドレ
ス変わってたらどうしようかと思ってたの。(間)そう、さつき着いたとこ。この後？ い
いの？(間)嬉しい！ ランチ楽しみー(間)ほんとは父の所へ行きたいんだけどね… ず
っと会ってないのよ。でもお姉ちゃんが明日にしるって…(間) そうだよね！ えーと
ね、確か… フローレンスクラブだったかな？ そうそう！ ありがとう！ うん、大丈
夫。(間)わかった、じゃあ駅のロータリーで待つてるね。後でねー(切る)

陽花、豚汁を飲むが、一口でやめて箸を置いてしまう。じっと、ちらし寿司を睨んで
いる。

やがて思い立ったように荷物を運び出し、やがて戻ってくる。

陽花、シオルダーバッグを開け、化粧ポーチを取り出し、口紅を塗りなおす。化粧を
点検し、持ち物を確認し、時間を確かめたりしているところへ、枇南子が少し慌てた
様子で入ってくる。

枇南子 陽ちゃん、どういうことなの？

陽花 それはこっちの台詞。どういうことなのこの味は？

枇南子 (慌てて) なにかへん？

陽花 その辺で売ってるふつうのお酢使ったでしょ？ ゴマも炒ってないでしょ？

枇南子 なんだ… 驚かさないでよ。

陽花 斎藤家自慢のちらし寿司が安っぽい味になっちゃって… がっかり！

枇南子 大げさね… あなた、家出したんですって？

陽花 お姉ちゃんみたいな人でも、一人になると暮らしの質が落ちるのねー

枇南子 (堪えて明るく) 何人分つくると思ってるの？ 予算も限られてるのよ。あなたに
出すためにこしらえたんじゃないんだから…

陽花 じゃあ出さないでよ！

枇南子 (驚く) どうしたっていうの？

陽花 私のために作ったんじゃないなら、出さないでよ！ 外で食べて来いって言うて
よ！

枇南子 ……

陽花 七年ぶりに里帰りしたのよ。

枇南子 だったら前もって、もっと早く連絡すればいいじゃない。前の日になって言われて
も…

陽花 突然帰りたくなつたのよ！ いけないの？

枇南子 いけなくはないわよ。でもこちらの事情もあるって言うてるの！ 昔みたいに我
儘は通らないわ。

陽花 なによ。お父さんの世話するのしんどくなったからって施設に入れて、なんで他人の

世話しなきゃならぬのよ！

枇南子 陽花！ なんてこと言うの。一日に一食、それもカップラーメンとか菓子パン一つなんて子がいるのよ。あなた仮にも教育に携わっている者として恥ずかしくないの？

陽花 …もう携わってないわよ。幼稚園閉鎖しちゃったもん。いつ再開できるかわからないし…

枇南子 だって、近くの幼稚園で採用してもらえたって…

陽花 (遮って) おとしの春だったわよね？ 施設に入れたって… あたし、本当は嫌だったのよ。お父さんが施設だなんて… でもあたしは帰ってお世話できるわけじゃないし、お姉ちゃんができないって言うんなら仕方ないと思って…

枇南子 ……

陽花 なのに、ボランテアって… お姉ちゃんって、昔からそういうところあるわよね。

枇南子 そういうとこって？

陽花 他人には優しくて、身内に厳しいのよ。昔からそうよ。あたしが小学校に入学した時、お姉ちゃんは生徒会長で…

枇南子 そんな昔…

陽花 お姉ちゃんは下級生に優しいってみんなが言っていた。友だちにも、羨ましいって言われた。でもお姉ちゃんは、いつもあたしを置いて登校しちゃって…

枇南子 だって陽花に合わせてたら間に合わないもの。生徒会長だから遅刻できないでしょう？

陽花 給食だってそうよ！

枇南子 給食？

陽花 ユキちゃんには優しくして、無理して食べなくてもいいよって言うのに、あたしには残すなって…

枇南子 (思い出す) あれは、あの子は体が小さくて吐きそうにしながら食べてたのよ。あなたは好き嫌いが多くて…

陽花 (遮って) 何が子ども食堂よ！ 私の家を勝手に使わないでよ！ だいたいそんな時間があるなら、一回くらい福島に来てくれたっていいじゃない？

枇南子 だから、さっきも言ったでしょう？ それは申し訳なかったと思ってるわ。でもね…

陽花 妹が被災したのよ。よその子助ける前に、自分の妹助けなさいよ！

沈黙。

陽花 裕一がね、家を建てるって言うの。

枇南子 ……

陽花 当然よね、両親にこのままマンション暮らしさせるのは忍びないし、もともと親が建てた家に私たちが家賃も払わず住んでいたんだから。

枇南子 偉いわね、裕一さん。

陽花 エライわよ。そのために、慣れない土地で朝から晩まで働いて、疲れ果てた顔して帰って来て、ゆつくり話す時間もないの。もううんざり… 前の暮らしに戻りたい。でも戻れない。…：わかってるの。家を建てるって気持ちだけが彼を支えているのよ。だから何も言えないの。

枇南子 辛いわね、あなたも…

陽花 誰にも言えないけど、あたしが大学生だったら… 福島で働いてるだけだったらって思ってしまうの。

枇南子 ……

陽花 自分でも驚いちゃった。結婚して二〇年も経つのにね。福島に骨を埋めるんだと思っていたのに… ずっと東京に帰りがたかった… すぐ帰りがたかったの。でも帰れなかった… 帰ったらもうあつちに戻れないような気がして…

枇南子 陽ちゃん…

陽花 でも東京に着いたら、なんかイライラするの。こっちはなんにもなかったようにノホホンと生きてる… 福島の原発は東京のためにあるのよ。なのに東京の人は味方じゃない… 何が復興五輪よ！ 勝手なことばかり言って… お姉ちゃん、この気持ちわかる？

枇南子 (うなづく)

陽花 この家売ってくれる？

枇南子 ……？

陽花 この家売って、生前贈与で私の取り分をください。現金が欲しいの。裕一を楽にさせたいのよ。そのお金で家を建てるわ。そうすれば彼もあんなに無理しなくてすむもの… 明日、お姉ちゃんからお父さんに話してくれる？ お願いします…

枇南子 (言葉が出ない)

陽花 私、ちよつと出かけるね。友だちから連絡があったの。ほら、短大の時のリンちゃん！ 憶えてる？ 披露宴でモー娘。やってくれた… あれでも今は副園長なんだって。すごいよね！ ランチご馳走してくれるっていうから行ってくるね。

陽花、出て行く。

枇南子、崩れるように腰を下ろす。そして、放心しつつも、手は残った食事を片付けながら、じっと耐え、今起きていることを理解しようと努めている。
やがて立ち上がり、庭を眺める。やがて障子を閉めて、部屋を出て行く。

【第二場】

昼近く。

枇南子、布巾と小さなガラスの花瓶を持って入ってくる。花瓶を机に置き、障子を
開け放し、ゆっくりと庭を眺める。いつものように力強くテーブルを拭き、クリス
マスリースの向きを整える。花瓶をテーブルに置き、花の向きを整え、微笑む。
机に向かい、一通の封筒に手をかけるが取り出すのはやめ、傍にあったアルバムを
手に取る。椅子に腰を降ろし、亡き母が好きだった花に語りかけながら、アルバ
ムをめくっていく。

枇南子 陽花、可愛かったわねー 可愛すぎてみんなで甘やかしたわね。ほらこれ、生ま
れたばかりの時に紫陽花の前で写したの、お母さん若い。(思い出している) 紫陽花が
多いね。これは四歳くらいかな? 「これが陽花の花よ」って教えてね。幼稚園のお迎え
もよく行ったなー これ、枇杷食べてる(笑) 陽花は枇杷が好きだったね…

間。

枇南子 …お母さん、私大丈夫かな? ちゃんとやっていけるかな? (間) お父さんには
お母さんがいる。心の中にお母さんが生きているから、私や陽花のことを忘れても、自
分を忘れてはいない。陽花には裕一さんがいる…

放心したように宙を見つめる枇南子。

やがて、枇南子の携帯電話が鳴り出す。

枇南子 もしもし… 裕一さん! 久しぶりね。あなたの声を聞くの何年ぶりかしら…
(間) いいの、いいのよ。みんな毎日のことで精いっぱい。お互い様よ。それより体は
大丈夫? ずいぶん働いてるみたいじゃない。(間) それがね、もう出かけてるのよ。
私も話さなきゃと思ってるんだけど、起きた時にはもういなくてね… 昨日もなの。待
っていたんだけど、私は十一時には眠らなきゃならないものだから…

枇南子、裕一の話に耳を傾けながら障子を閉めるが、少しだけ開いたままとなつて
しまう。

枇南子 ちよと待って! あなた達が一緒になって二〇年くらい? 私の知る限りこんな
ことは一度もないはずだけど、あった? だから、陽花が家出したことがありましたか
って言ってるの。(短い間) だったら余程のことよ。そう考えるべきでしょう? (間)
あのね、震災から一度も帰ってなかったのよ。あの陽花がよ!(やや長い間) 離婚届が

あったの？ ちょっと、落ち着いて！ あの子が離婚を考えたとしても、あなたを嫌いになったからじゃないと思うわ。(間) それはわからないけど… ねえ裕一さん、陽花としっかり話をしてあげて。あの子はワガママなところもあるけど、必要な努力はするし、あなたのことが(本当に好きなのよ。)ちゃんと話を聴いてあげて。(間) でも体を壊したら元も子もないわ。(間) そのうち体を壊すわよ… ね、私思うんだけど、ご両親はほんとうに家を建てて欲しいと思ってるのかしら？ 怒らないでね。あなたの気持ちにはわかってるつもりよ、でもね… キヤツチ？ キヤツチって？(間) わかった、とにかく連絡するように言うわね。(電話が切られた様子)

いつの間にか、廊下に陽花が立っている。

枇南子、電話を切ると同時に陽花に気づく。

枇南子 (微笑む) 裕一さんよ…

陽花 (机の上に開かれたアルバムを見て) うわあーこれ見るの何年振りだろう… (手に取り顔を近づける) お母さん若いなー あたし可愛い！(アルバムをめくりながら) ほんと、どれも全部可愛い！

枇南子、陽花の様子を見つめている。

陽花 (一枚の写真に目が留まり) ねえ、これお姉ちゃんいくつ？

枇南子 どれ？

陽花 これ、ガクアジサイの。

枇南子 九才か… 十歳くらい？

陽花 つていうと三年生？

枇南子 そうね。

陽花 (再びその写真を見て) 最近の子とは違うよね… すごくしっかりした顔してる。意志的というか…

枇南子 ……

陽花 あこれ！ これ好きだったなー

枇南子 どれ？

陽花 (反対側のページにある写真を指し) これ、黄色いクマさん。

枇南子 (のぞき込む) ずっと耳持ってるから黒ずんできちゃってね…

陽花 お姉ちゃんが、綺麗にしてあげるって漂白剤につけてシロクマになっちゃったのよねー

枇南子 お姉ちゃんが悪いって泣いて怒って… 口利いてくれなくなったのよね。

陽花 ……あの時は何年生？

枇南子 五年生。

陽花 五年生か… あたし、ひどいよね。お姉ちゃんだって、まだ子供なのにね。……ごめんね。

枇南子 ……どうしちゃったの？

陽花 ケアマネさんに会ったの。

枇南子 篠原さん…？

陽花 (うなづく)

枇南子 なにか言ってた？

陽花 ……お姉さん、調子はいかがですかって言われて… あたしなんにも知らないから、姉なら父親を施設に入れてボランティアに精を出してるって…

枇南子 (苦笑) 篠原さん、驚かれたでしょうね。

陽花 ものすごくビックリした顔して、お姉さん、やっとここまで回復したんですよって… お父さんがここに入った後、ずっと家から出られなくなってたんですよって…。

枇南子 そう。

陽花 それでお茶に誘ってくれたの。

枇南子 そう。

間。

陽花 ほんとうなの？ お父さんが街を徘徊したって…

枇南子 ……ほんとうよ。

陽花 お父さんが暴れてお姉ちゃんにケガさせたって… ほんとうなの？

枇南子 病気のせいよ。病気がそうさせるの。

陽花 どんな怪我？

枇南子 ……

陽花 どんな怪我をしたの？

枇南子 腕と鎖骨を骨折したの。あとは火傷。

陽花 どうして火傷？

枇南子 ……

陽花 どうして？

枇南子 ヤカンがね…

陽花 ヤカン？

枇南子 当たったの。

陽花 ……投げられたってこと？

枇南子 ……

陽花 お父さんが投げたんだよね？

枇南子 お父さんはね、お母さんに会いたくて… 会いたくて会いたくてたまらなくなつてたのね。だから私がお母さんと同じようなことをするのが辛くなったんだと思う。同じような格好で、同じ道具を使って…

陽花 そんなの… 勝手すぎるよ！ お姉ちゃんが仕事を辞めるように仕向けたのはお父さんじゃない！ 辞めたくなかったんでしょ？ あの時お父さんまだ七十一よ。自分でやれることだっていっぱいあったはずなのに、それまでと同じ生活したいもんだから…

枇南子 でもお父さんは仕事の多い人だったから…

陽花 (遮る) もうやめて。

枇南子 ……

陽花 あたしわかってた。うちの家族はみんなそれぞれお姉ちゃんに甘えてるんだって… 少しずつお姉ちゃんに寄っかかって成り立ってるんだって…

枇南子 ……

陽花 たしかにお母さんは体が弱かったけど、お姉ちゃんがしつかりしてるから甘えてるところもいっぱいあった。

枇南子 私がそうしかかったのよ。お母さんに長生きして欲しくて、なるべく疲れさせないように… だからお母さんが死んだ時、どうしていいかわからなくなって… お父さんがショック受けたように、私もものすごくショックだった。

陽花 ……

枇南子 自分の将来とか、これからどう生きるとかちやんと考えないまま、お父さんが望むなら… 仕事を辞めたの。それが一番の間違いだっただと今はわかる。

陽花 あたしね、あたしすぐく勝負な言い方かも知れないけどね、お姉ちゃんのために、自分が早くこの家を出た方がいいって思ってたのよ。そうすれば少なくとも私はお姉ちゃん甘えなくなるから…

枇南子 (驚く) そんなこと思ってたの？

陽花 でも却ってお姉ちゃんの負担を増やしちゃった。お姉ちゃんが教師を辞めるなんて考えなかったもん。お父さんがもう少し自分のことをやればよかったのに！ お父さんって立派な人って思われてるけど、ちよつとインチキくさいところあるよね。男女同権とか女性の社会進出とか、推進派みたいな顔してたけど実はよく思っていないフシがあるもん。

枇南子 (間あって) ね、お父さん、あなたのことちやんとわかった？

陽花 わかったわよ。嬉しそうだった…

枇南子 (安堵して) そう。

間。

陽花 福島なんか行くなって…

枇南子 え？

陽花 お父さんがもっといい男を探してやるって、福島の子とは別れるって…

枇南子 ……昔に帰ってるのね。

陽花 あーなんかもうお父さんと会うの嫌になってきちゃった…

枇南子 大丈夫！ 私からちゃんと話すから。

陽花 ……

枇南子、机の方に向かい一通の封筒を取り出す。地元の信用金庫の名が記された封筒の中から書類を取り出し、陽花に見せる。

そこには、どこまでも妹を守り安心させようとしながらも、自分の役割に縛られ追い詰められた姉の姿がある。

枇南子 考えたの。お父さんが生きているうちはここは売れないけど、土地を担保に銀行から融資を受けることはできると思うの。そのお金であなた達の新しい家を建てればいいと思うの。

陽花、呆然と姉を見つめる、やがて枇南子の傍に寄り、抱きしめる。

陽花 ごめんね… ほんとうにごめんね。

枇南子 どうしたの？ 大丈夫よ。何とかするから心配しないで。

陽花 違うの！ あんなの本気で言うわけじゃないじゃない！ そんなこと考えてないよ。裕一が倒れたってここを売ろうなんて思わないよ。

枇南子 そうなの…？

陽花 そうよ！

枇南子 売らなくていいの？

陽花 当たり前でしょ？ お姉ちゃんしっかりして… ううん、しっかりしないでいい！ ほんとうの気持ちを言って！ もうしっかりしないで。

枇南子は、なんといいのかわからず、もじもじしてしまふ。

陽花は、少しだけ何か吹っ切れたような気持になっている。

陽花 大丈夫！ 私だってもう大人なんだから対等でいいのよ。だから無理しないで、なんでもほんとうのことを話して。頼りにならないかも知れないけど、でもお姉ちゃんの力になりたいと思うてるんだから。

枇南子 ……ありがとう。

陽花 病院行ってるの？ 精神科みたいなの……

枇南子 いいお医者様に出会ってね、心療内科なんだけど、そこで薬をもらってるの。

陽花 どんな薬？ 安定剤とか？

枇南子 安定剤はもう飲んでないの。一応お守りみたいに持つてはいるけど、飲んでない。でも眠るための薬はね…… 飲まないで眠れないの。

陽花 ……大丈夫なの？（遠慮がちに）ほら、癖になって手放せなくなるとか…… 色々聞くんじやない？ 恐くない？

枇南子 （微笑）眠れない方がよっぽど怖い。

陽花 いつから飲んでるの？

枇南子 お父さんが歩き回るのがひどくなった時だから…… 四年前くらい？ 私も気になつてたの。陽ちゃん病院は？

陽花 ……？

枇南子 通ってたでしょ？ 仙台の病院に……

陽花 震災で終了よ。続けられるわけない……

枇南子 ……そうだね。

陽花 ちよこちよこ着床はしてたのよ。でも流産しちゃって……

枇南子 ……つらかったわね。

陽花 いいの！ 不妊治療ってものものすごくお金かかるし、あたしたち共働きで、家賃がいらないからできたんだもん。

枇南子 そうね。

陽花 （微笑）そんなにうまくはいかないよね。

枇南子 新しい幼稚園は？ 辞めちゃったの？

陽花、すぐには応えられない。

陽花 あたしだって震災がなかったら、春から副園長だったのよ。

枇南子 ……

陽花 でもさ、新しいところにはそのやり方があるし…… 一回りも年下の子に命令されたりして、なんか我慢できなくて…… 昔はそういうの上手くやれるタイプだったんだけど……
なー

枇南子 色々あったからよ。

陽花 でもまた探す。仕事する。そしたら毎回は無理だけど、月に一回くらいはこっちに来て、子ども食堂ができるもん。

枇南子 手伝ってくれるの？

陽花 言ったでしょ、力になりたいの。

枇南子 ありがとう。

陽花　なんか楽しくなってきた。大学生って何人くらいいるの？　男子もいる？

枇南子　大学生って？

陽花　ほら、ナナミさんだけ？　おととい…　子どもの貧困について考えるサークルなんてね…　こんな世の中になるなんて考えなかったな！

間。

枇南子　七海ちゃん、大学に行きたかったのよ、勉強、すぐできたらしいの。でも行けなかったのね、母子家庭で。

陽花　大学生じゃないの？

枇南子　働いているのよ。いい子なのよ、小さな子たちをよく見てくれる。でも折り合いがつかないのね、どこか…　時々そういうことがあるの。

陽花　…：嘘をついたってこと？

枇南子　（笑って）私もずいぶんウソをついた。結婚の約束をした人がいたけどお父さんが許さなかったとか、奥さんのいる人と何年も付き合っていたとか…

陽花　（慥然）そういうのとは違うわよ。経歴詐称よ。いいの？

枇南子　叱りたくないの、私は。叱ったら、もうここに来なくなるわ。そうやってあの子の場所を無くしたくないの。それは絶対にしたくないの。

陽花　じゃあどうするの？　教育に携わる者として放つといていいの？

枇南子　ほっといてない。

陽花　…：

枇南子　ちゃんと見てるわ。気にしてあげること、見ていてあげること。それが大事だと思う。

陽花　…：

枇南子　みんながそうはいかないけど、あの子はきつと気が付く。私たちだって誰かに見ていて欲しいじゃない？　気にして欲しいじゃない？

陽花　（少し間あって）そうね。ほんとうにそうね。

間。

枇南子　幼稚園の先生になりたいんだって。

陽花　それなら大学行かなくてもなれるわよ！　今度教えてあげる。

枇南子　（思いついて）ね、来週の土曜までいられないかしら？

陽花　なんで？

枇南子　久しぶりにふたりで読み聞かせをやらない？　子どもたちに聞かせたいの。

陽花　いいわね！

枇南子 でもそんなに引き留めたら裕一さんに叱られるわね…

陽花 いいわよ、叱られても。(考えを巡らせている)なに読む?ぐりぐらは? ホット

ケーキを読んで、ホットケーキを出すっていうのは? 喜ぶんじゃない?

枇南子 喜びそう! あれカステラだけど…

陽花 あれは? あれ!

枇南子 あれって…

陽花 お姉ちゃんのオオカミとあたしの三匹の子ブタ!

枇南子 あれね! できるかなー(と、オオカミの声を出そうとしてみる)

陽花 最強コンビって言われてたよねー ちよっと見てみようよ。本の部屋にある?

枇南子 全然整理してない。すぐ見つかるかな…

陽花、小さくハミングしながら弾むように部屋を出て行こうとする。

陽花 (小さく歌いながら) ララララ あひるさん…(枇南子を振り返り) はいっ!

枇南子 ……はい?

陽花 (誘うように大きく歌う) ララララ あひるさん…

枇南子 があがあ…

陽花 アヒル、年取ってるなー もう一回! ララララ あひるさん…

枇南子 (立ち上がり、陽花を追う) ガアガア!

陽花 ララララ 山羊さんも…

枇南子 めえー

陽花 最初からね!

二人、部屋を出て行く。

陽花 丘を越え 行こうよ 口笛 吹きつつ

枇南子 空は澄み 青空 牧場を 指して

陽花 歌おう

枇南子 朗らかに

陽花・枇南子 共に手を取り ランラララ ララララ

陽花 ララララ あひるさん

枇南子 ガアガア

陽花 ララララ 山羊さんも

枇南子 メェー

陽花・枇南子 ララ 歌声合わせよ 足並み揃えよ 今日愉快だ

冬の日差しの中、朗らかな二人の歌声が聴こえ、遠ざかっていく。
テーブルの花が、その部屋と庭を見守っている。

(幕)

※挿入歌「ピクニック」 作詞 萩原英一 作曲 イギリス民謡